

松井健児著 『源氏物語に語られた風景』

風景和文への招待』

中 嶋 真 也

本書は『源氏物語の生活世界』に続く、松井健児氏による二冊目の『源氏物語』に関する論文集である。その構成は以下の通りである。

はじめに

序章 風景和文の主題

第一章 風景和文の形成——『源氏物語』の空間の成立

第二章 風景和文の理想——『源氏物語』の春秋の幻景

第三章 風景和文の領域——『源氏物語』の演技する空間

第四章 風景和文の変容——『源氏物語』の景物の構成

第五章 風景和文の意匠——『源氏物語』の橋と鳥の形象

第六章 風景和文の遠近——『源氏物語』の接続する主体

終章 風景和文の思想

*

附章一 海辺の風景——『源氏物語』の須磨・明石から大堰へ

附章二 よい匂いのする情景——『源氏物語』の花の庭・樹木の香り

附章三 四季の歌——『源氏物語』の和歌生活としての自然

参考文献

あとがき

書き下ろしの序章・終章の他は、二〇〇四年から二〇一九年までに発表された論文から成り立っている。目次を一読してつかめるように、「風景和文」という言葉がキーワードになっており、書名の副題にも用いられている。この言葉は松井氏による造語である。

本書のテーマは序章冒頭に「本書の主題は、『源氏物語』に語られた風景である」（二二頁）と明確に設定される。続いて、「語られた風景」が研究対象となる理由とその問題点、『源氏物語』の風景観、本書の方法意識、研究史などが述べられ、盛りだくさんの内容であり、本書を通読する上で、読み飛ばせない内容になっている。また、キーワード「風景和文」の定義も述べられている。それは「仮名文によって構成された自然景観の主観的叙述」（一九頁）という意味である。「同時代の人びとの期待を裏切るような、驚きの表現をほとんど取らない。むしろ、人びとに共有

された季節感や古歌や歌ことばの群れを尊重しつつ、それらを新たに構成することによって構築される」(二二頁)ものでもあるという。

第一章では、「要約・説明」「描写」「和歌」と従来区別されて述べられていた『源氏物語』の文章に関して、「語ること」「示すこと」「歌うこと」という三つの言葉を用い、これらが「三つ組みであること」によって、その叙述に相互に影響しあい、その全体として、『源氏物語』の空間を作り出している」(三八頁)と本書で展開される『源氏物語』の叙述の様相が述べられている。その他の章に関しては、各論のようになっており、各自で是非読み進めてほしいが、この書の根底には、松井氏の感じ取る『源氏物語』の豊かな風景に接することの喜び」(一九二頁)がある。そして『源氏物語』の風景和文への考察が、わたくしたちの生き生きとした生活世界に連なるものであること」(一九三頁)への願いでもあることがうかがえる。古代の作品の読解が現代の我々の生活へと意味あるものとして立ち現われていることの重みを感じ取っておこう。

なお、序章には『源氏物語』に関する研究史、参考文献などが小気味よく紹介されており、私のような『源氏物語』の高い研究の蓄積に恐れおののいてきた人には大変ありがたいものになっている。学生の方々も読んでおいてほしいところである。

「風景和文」は松井源氏学のキーワードとして今後語られていくものである。この新刊紹介では、その様相を十分に紹介しているとは到底思えない。その点のおわびを申しつつ、是非、多くの方々が、この書からさまざまに導かれ、豊潤な『源氏物語』の世界に触れてほしいと願うところである。